

デ・レーケと富山

明治25年8月27日から10月4日

まで、デ・レーケは6回目となる富山訪問をする。この滞在について、市川紀一さんは次のように推測している。

地元紙「北陸政論」が同年8月9日から25日まで、「常願寺川（治水小言）」と題した連載記事を掲載。改修工事の不備を厳しく指摘し、県当局を追求した。同月14日に知事は高田に臨時議会に臨むに当たって連載記事を翻訳してデ・レーケに送付するように指示し、4回分の記事を軽井沢に滞在中のデ・レーケに送付したことから、被害の状況を詳細に見届けて計画

を遂行させるために、予定を早めて富山に向いて来たのではないかと、とのことである。

ちなみに、この記事を書いたのは、同新聞主筆の西師意（当時28歳）であった。彼の批判の要点は次のようなものだった。

「施工中の常願寺川の改修工事は、堤防の強化を中心に、一部河身を変更するもので、「一時を彌縫せんとする」「姑息」な計画である。

上流に膨大な土砂をかかえるこの暴れ川は堤防で洪水を防ぐことはできない。強固な堤防を築くのではなく、短い堤防を重ねるよう

に設ける「霞堤」を用いるべきである。そして、新しい河身（非常予備線）を上滝から海まで建設する。普段、水は本川を流れるが、大雨の時は非常予備線を洪水と土砂が一緒に流れることにより本川を守る。」

結局、森山知事は14日付けで非

職を命じられ、後任に徳久知事が就任した。

9月5日に開会された臨時県議会は、常願寺川改修工事の予算執行をめぐって大荒れとなった。開会前日の4日には、大雨で常願寺川は出水し、工事中の多くの箇所が被害を受けた。9月8日には、内務省第3区（新潟）土木監督・小柴署長が来富。翌9日、高田はデ・レーケの事務所へ小柴署長を交えて「治水小言」に対する弁明書を作成し、高田雪太郎名で県に提出した。デ・レーケはほとんど毎日現場へ出かけていたという。

同年11月4日から28日までデ・レーケは7回目の富山滞在をする。この頃には常願寺川本流の改修工事はあらかた完成。水路工事は10月15日に全て完成していた。デ・レーケは、改修工事の全区間を視察してまわった。